

どのようにして、人同士がコミュニケーションをとるのか

文 佐渡島庸平

text by Yohei Sadoshima

教育者の工藤勇一さん、哲学者の苫野一徳さんの共著『子どもたちに民主主義を教えよう』という本にとっても共感した。

日本において民主主義は、明治維新以降。まだ150年ほどしか試していない政治体制だ。世界でもフランス革命以降、230年ほどしか経ってない。我々は、民主主義の中で生活していると思っているが、果たして本当に民主主義を知っているだろうか。空気存在を知らなくても、生きていつづけられるように、民主主義のことを何も理解することなく、生活をしていくことはできてしまう。

民主主義に対する大きな誤解は、多数決だ。多数決で決めることを民主主義的だと僕自身も思っていた。

しかし、民主主義の本質は、話し合いだ。

多数決の何が問題か。勝ち負けがはっきりするからだ。負けた人が、社会からいなくなるわけではない。多数決で負けたとしても、同じ社会の構成員として、共に社会をつくっていく。負けた人に気持ちよく参加しつづけてもらうことが難しい。そして、すべてのことで、多数決の勝つ側にいつづけることはありえない。誰もが負けることがある。誰もが負けた人として、社会に参加するしかない、その社会は居心地が悪い。

どうやって勝ち負けをつけずに、話し合いによって、納得できる共通解に辿り着くのか。そこそが民主主義であり、そのような話し合いの仕方を学校で学ぶ必要があると工藤さんと苫野さんは説く。

スポーツは、勝ち負けがはっきりつく。僕がやっ

ている本の編集者も、ある意味で勝ち負けがはっきりつく。100万部の本と1万部の本がある時、1万部の本の編集者が、いい本をつくっているという自負があっても胸をはるのが難しい。数字の分りやすさは、勝敗をはっきりとさせる。企業も時価総額が大きい会社の方が、小さい会社よりも価値があるような気がしてしまう。SNSのフォロワーもだ。数字があるから、白黒がはっきりして、努力できるということもある。競争は楽しい。競争が個人の成長を促してくれることもある。しかし、勝負は常に負ける側をつくるということを意識しないといけない。

僕が、白黒ははっきりつけるのが好きなのも、競争をいいことだと思うのも、自分が勝つことが多い側についていたからだけかもしれない。

僕が民主主義を何も知らなかったということが、この年になってようやく分かった。そして、勝ち負けをはっきりさせないことの重要性も。どうやってものごとをあいまいなままにしておくのか。あいまいでいることの難しさと大切さをこの本を読みながら、実感することができた。

今、民主主義、対話、聞くことなどをテーマにした本がたくさん出ている。どのようにして、人同士がコミュニケーションをとるのか。もつとも人として基本のことが、より求められている時代になっている。さまざまな技術革新によって、コミュニケーションが進化するということが起きるのか。もしも起きたら、僕たちは、本当に画期的な時代に生きている。

Profile

株式会社コルク 代表取締役
2002年講談社入社。週刊モーニング編集部にて、『ドラゴン桜』（三田紀房）、『働きマン』（安野モヨコ）、『宇宙兄弟』（小山宙哉）などの編集を担当する。2012年講談社退社後、クリエイターのエージェント会社、コルクを創業。著名作家陣とエージェント契約を結び、作品編集、著作権管理、ファンコミュニティ形成・運営などを行う。従来の出版流通の形の前にあるインターネット時代のエンターテインメントのモデル構築を目指している。

